令和元年度モデル実施園座談会議事録

１　開催日時

　令和２年９月１６日（水）　１４時００分～１６時００分

２　会場

　中央コミュニティセンター　８階　千鳥・海鴎

３　参加者

　別紙のとおり

４　内容（座談会部分、課長挨拶略）

　下記のとおり

（由田学園千葉幼稚園山﨑園長）

由田学園千葉幼稚園の山﨑です

まず、発表の前にこういう場を設けてくださったご担当者の皆様に感謝申し上げます。

今は自分の園のことで精いっぱいで、毎日の保育を安全安心に、どうやって作っていこうか、と考えながら実施しており、今しがた課長さんの挨拶でもありましたが、コロナ禍であっても子どもたちの小学校に向かっていく育ちを補償し、充実した小学校との関わり合いをもたなければならないと感じました。

では、私たちの園が発表した内容について説明します。

本園の教育目標や理念などはこの資料に書いてある通りです。

資料にもありますが、教育目標の具現化について、私たちの園は園庭環境と関わる保育であったり、遊びを通じた保育を実施しておりますが、そのすべてが小学校に向かっていく育ちの道筋になることを改めて振り返り、考えさせていただいた公開発表会でした。

年長組の保育の在り方、主体的な遊びを中心とした保育であり、子どもたちが環境、物、人、場所に関わっていくことを通して、子どもたちの意欲、アイデア、主体的な動きといった情緒面を育てていることが特徴となります。

創って遊ぶ、遊ぶものは創るという保育がどのように小学校に繋がっていくかを実践の写真を通しながら問題提起をしていきました。

また、遊びの中で必要に応じて文字、数字、自然現象に興味関心を持つ姿が子どもたちの育ちの中にみられることも年長組の姿だと思うので、遊びの中で思考力の芽生えや数量・図形・文字等への関心の育ちが実際にどう育っていくのかを発表させていただきました。

また、園の畑での収穫や栽培を通して、子どもたちがただ畑仕事をするだけではなく、その中から様々な発見や喜びの表現、食への関心が表れている姿からこのような保育形態がどのように小学校への育ちに向かうのかを話せたのが貴重だと思いました。

アプローチカリキュラムの作成について、主体的な遊びを通して保育を行う園のカリキュラムはとても混とんとした状況がありました。先月の育ち、今の興味関心、そこを踏まえたねらい、内容、その先の予測が多様に、ごちゃ混ぜになっている課題に対し、松嵜先生からの助言により整理整頓できたことが私たちにとってありがたいことでした。

そこで、過去のモデル園であるひまわり幼稚園が行っていた色ペンを使ってのカリキュラムを作った後に加筆修正する方法を参考にいたしました。

遊びを中心とした保育というのは、計画、予測は立っていても、子どもたちの主体的な興味関心に応じて環境整備を行うほか、遊びのテーマも変わることが往々にあるため、松嵜先生からウェブ図を使って指導計画を立ててはどうかとご提案いただき、資料の松嵜先生の宿題という項目で年長組の指導計画を取り組んでみました。

子どもたちの日々の興味関心、発見、活動に向かう姿をまとめていく作業を通して、私たち自身がもっと考えなければならないこと、子どもたちの育ちを補償しなければならないことに気づいたり、その過程が１０の姿の共同性や思考力の芽生え、豊かな感性と表現などに繋がっていることを再確認ができました。陰に興味をもって始まった一つ一つの遊びが一つの大きな活動になり、クラスの劇に繋がったりしました。

ウェブ図では、10の姿から次の予想される姿を追っていくことができました。私たちも勉強になり、誤っていたことも多々あったこともわかりました。子どもたちは遊びから何を学んでいて、それがどのように、次の子どもたちの生活や遊びに繋がっていくのかを読み取っていきながら活動を可視化していくことであったり、行事の中に取り入れることであったり、単発なものにならないように大事に育てていくことが小学校に上がっていく力の積み重ねになっていくことがわかり、実践から発表することが出来ました。

発表の中では、幼稚園の保育は小学校の教育にどう繋がるのかという問題提起も行いました。幼稚園では今日の遊びが明日に繋がり、明日の遊びがまた次の日に繋がっていくということで、連続性を持って保育を行っている中で、保護者の皆様が小学校に入学した後、45分間座っていることが可能なのかという心配をされている姿があります。幼稚園での遊びが小学校で授業を受ける基礎になっているのかという疑問です。そのことに対して、公開保育の全体会議で、千葉市立花見川第三小学校の足立校長先生がごっこ遊びは小学校に繋がっていく土台になっている。子どもたちが折り紙を分解しながら考えている姿から子ども子どもたちの思考の芽生えがみられたということを仰っていただきました。教務主任の栗林先生からはハサミも一年生からではなく、幼稚園でも普段から使っていることを考えると、幼稚園や保育所での経験の土台があって小学校に繋がっていることが分かったというお話をいただきました。作新小学校の先生方からは、生活科の体験を通して学ぶという教科に幼稚園の遊びがつながっていくこと、子ども子どもたちが素材の扱いになれているという姿が見られたということをお話いただきました。小学校の先生方のお話を受けて、丁寧に子どもたちの育ちを読み取りながら小学校入学へとつなげていくことが大事なんだということを学ばせていただいた公開保育後の全体会議となりました。

小学校と保育園の連携については、令和元年度は、千葉市立花見川第三小学校は近隣なので、１、２年生が幼稚園に来て交流するという積極的な取り組みができたり、近隣の花見川第二保育所の年長組ともお互いの園を行き来するなどの連携がありました。令和２年度は、９月に入ってから花見川第三小学校の教務主任栗林先生と連絡を取り合い、どんなことが可能か、難しいかという話をさせていただきました。校庭のどんぐり拾いに行ったり、校庭を思いっきり走らせていただくことは可能なことだとわかりました。今年長組は運動会への活動に向けて、子ども子どもたちがいっぱい走ろうという気持ちがわいている時なので、校庭等を利用させていただきながら、小学校の大きさや小学校という場所を身近に感じる取り組みを二学期、三学期と行っていきたいと思っております。

お互いに関わり合いが出来た花見川第二保育所との交流はコロナ禍では難しくて今年度は行っていません。子どもたちが近隣に関心を持ちながら、地域の子どもとして育っていくということも忘れてはいけないと今年度は強く思っています。子ども

連携・接続においては、幼稚園の方から願いをもって小学校にアクションを起こしていくということの大事さをすごく痛感しておりますので、自園の保育のことだけだけではなく、子どもたちが小学校に通うということをもう一度考えていかなければならないと思っています。

コロナ禍の保育の取組としては、送り迎えの保護者が園庭や保育室に入れない状況であるため、毎日の保育を伝えるために写真を使いながら、昨年度よりも丁寧に子どもたちに何が育っているかを伝えています。

また、毎年配布しているもうすぐ小学生の資料は目に見えて、幼稚園の保育、小学校の教育というのが分かるリーフレットになっているので、例年は保護者会のときに、改めて話していくことで、お母様方も小学校というものに向かっていく上で心持が変わっていく資料になっていることを実感しています。

今年度も折を見て、公開保育で小学校の先生方からお話をいただいたことを含めて園だよりに掲載したりしたいと思います。

また、コロナ禍の保育では、一つ一つできないこともたくさんありますが、実はできないことで、すごく充実して子どもたちが育ったと思われることもたくさんありました。例えば、昨年のようには行えない全園児親子が集まる行事が２つありました。

一つは夏祭り、一つは保育参加です。夏祭りは夕方に全園児親子が集まって行う大きな行事でしたが、それがかなわないので、今年度は普段の保育の中で行うということに代えていきました。そこでは子どもたちの興味からお神輿づくりが始まり、ウェブ図を活用しながら年長組が主体となって、夏祭りを企画する活動が出来ました。いつもの年よりも、子どもたちがすごく盛り上がって、2日3日と夏祭りが続きました。

保育参加は、全保護者が集まって一日親子で過ごす行事です。これも密になるため行うことができませんでした。９月に1ヶ月かけてパパ先生、ママ先生になって、数名ずつ保育に入っていただくようにしたことで、普段の子どもたちの様子をよりわかってくださる機会になりました。

大きな行事として取り組んでいたことから、子どもたちが行い、子どもたちが計画を立てていく素朴な行事にシフトチェンジしています。その中で、子どもたちの何が育っているのかを、保護者にお話がなかなかできないため、写真を使って伝えているとことです。また、ディスタンスをとらなければならないのであればディスタンスを取れるような活動にしようとか、楽しくやるにはどんな方法があるかなと、話題にしながら毎日の保育がようやく順調に回るようになってきたというところです。

２学期になって子どもたちから「ランドセルを買いにいった」、「何色のランドセルにした」と話題が出始めましたので、そろそろ小学校マップをつくっていこうかと年長組の担任は考えています。子どもたちは小学校に向かって関心を持つ姿が会話や遊びに出ていますので、私たちがそれを大事にしながら、具体的に今この状況の中でできることで、小学校に親しみをもち、自信を持って一年生向かっていく子どもたちを育てていきたいと思います。

まとまりませんけれども、由田学園千葉幼稚園の報告を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。

（司会）

山﨑先生ありがとうございました。

続きまして、明徳土気こども園龍先生よろしくお願いします。

（明徳土気こども園龍主幹保育教諭）

皆さんこんにちは明徳土気こども園の主幹保育教諭の龍です。よろしくお願いします。

昨年度までは、私たちは明徳土気保育園という名前だったのですけれども、今年度より、明徳土気こども園と名前が変わりスタートしています。

本来ならば、3月の時点でですね、新築の園舎もでき、改修工事も終わり、新しい事業をスタートする予定だったのですけれども、まさかの昨年の大雨、台風災害とコロナウイルスの影響でですね、現在も新築、改修工事をやっている最中で日々、いろいろ考えながら、工夫しながら、保育をしているというところです。

では、昨年度の発表の報告をしたいと思います。

まず、アプローチカリキュラムに関しては、千葉市のアプローチカリキュラムの取り組みが昨年度で3年目ということだったので、1年目2年目の研修等も行かしていただいて、経過とか、どういうふうに取り組んでいくかとか、そういったものも、ある程度のことは把握しているつもりでスタートが違うなというのが私たちの印象でした。

4月までにですね年間指導計画にも就学を意識した今まで計画していたものの中から就学に関係するところはどこなんだろうとか、あと10の姿をどういうところで書いてあるんだろうかとか。逆に書いていないところ、意識できていないところはどこなんだろうか、そういったところを見直してアプローチカリキュラムを作成していきました。

期案だとか週日案とか、そういったものも取り組んでいるところだったので、冨田先生とのお話の中で、書いている中実際にやっていきながら、継続していくことの意味があるのではないかということで、そこに少しご助言をしていただきながら、後半のアプローチカリキュラムにつなげていたというような運びで指導計画の見直しを行いました。

私たちの園は土気小学校のお子さんと交流を多くもっているんですね。

資料にも書いてあるんですけれども、小学校との交流は主に7月からの園だよりを就学先の学校に持っていくことしていることですね。

私たちの園は、恵まれているのでその４校にしか就学先がいかないということで、とても連携がとりやすいということだと思うんですね。

それで４校に就学する方たちが自分たちでバスを使ったり、徒歩で行ったりとか、そういうことをしながら、園だよりを持参するということで計6回訪問をしました。

そして、１０月の自園の運動会に土気小学校の校長先生をはじめ来園していただきました。

そして11月には、土気小学校の授業参観に私たちが参加するということをしました。

私を含めて、年長の担任２名が行ったんですけれども、主に１年生、２年生の授業を見させていただいて、こういう授業をやっているかということを見ていきながら、どういうところで小学校と繋がっていけるかっていうことを再度私たちのほうで考えていきました。

12月に、生活科の授業で街探検ということで、私たちの園に小学生2年生が来園するということがありました。

これは毎年やっていることで、昨年度も2年生の子が来ました。

そして、一年生との交流会、これは近隣の保育園さんと同日になるんですけれども、1月に土気小学校にいきまして、学校案内をしてもらったり、授業に参加させていただいたりしました。

そして最後に年長発表会、私たちの園に土気小学校の校長先生がいらして、年長発表会を見ていただくということをやってきました。

小学校の授業参観とかそういったものを3ページに書いてあるんですけれども、4ページ目からの園だよりを小学校へ持参するという活動が私たちの中ではすごく印象に残っているので、少しこちらを説明していきます。

土気小学校をはじめ、4校に計６回を持っていたんですけれども、まず、子どもたちが、園だよりを持って行くときは初め緊張しているんですね、学校の先生も年長さんが来るということで、丁寧にこんにちはと対応していただきました。子どもたちは初めのうちは学校はこんなに大きいところなんだとか、プールってこんなに大きいところなんだ、そういったところに目を向けて帰ってきました。園だよりの持参が、2回目、3回目になっていると、子どもたちがどこを見てくれるかっていう、その目が少しずつ変わってしました。例えば土気小学校には大きな築山があるんですけれども、私たちの園にある築山は割と小さい築山なんですね。

それと比較して小学校の築山は何でこんなに大きいのかと、そういうところに目を向けたりとか、あと違う学校ですけれども、遊具を実際に遊んでみて、「これは小学生じゃないとできないよ」とか、そういったことを肌で感じてきているとかと校長室に訪問させていただいたときは「ソファーがフカフカだった」とか、そういったことを子どもたちが自分たちで感じてくることで、いろんな学校の見方ができてくるのかなということを思いました。

後半になってくると、子どもたちの興味関心っていうところもすごく広がってきまして、学校のプールの深さがどうなってるのかっていうことを確かめたいと1人の子が言って、それを園だより持っていたときに、学校の先生に言ったら「じゃあ一緒に測ってみようか」と言って、緑色の長い棒を持ってきて、一緒にプールに刺して「濡れたところまでは深さだよ」と声をかけていただいたり、浅い方と深い方でいろいろ試してくれたりして頂きました。子どもたちがプールの水を張っているところで実験をしたんですけれども、そのあとに一人の子が「プールは坂になっている」と発言したということについては、職員間でこれってすごいよね、子どもたちが、下が見えない状況などにもかかわらず坂になっているということをイメージしたっていうのがすごいねと話しました。

その次のページにあるマンホールの話なんですけども。

子どもたちはだんだん小学校について知ってくると、小学校だけじゃないところにも興味を持ち始めました。

それは自分たちで園だよりを持参をしているので、街中を歩いていたりだとか、バスで乗って行くことがあるんですが、その中で町の中で気づいたこととかがたくさん出てきたんですね。

子どもたちにデジカメを１台ずつ持たせていつも行っていたんですけれども、マンホールの写真を撮っている子がいて、「先生マンホールが場所によって全然模様が違うよ」と話しながらマンホールの写真を撮ってました。

マンホールの写真を並べてあるんですけども、この模様だけでも、子どもたちが、どういうところに興味を持ってるかっていうことも考えることができたんですね。

例えば共通点をみつけたりする子もいたんですけれども、共通点だったのは千葉市のマークがどのマンホールにもついているんですけども。それが一緒じゃないかと気付いた子もいますし、あと、鳥の絵が描いてあるとか、花の絵が描いてあるとか、そういったことに気付いた子もいました。

大人目線で言うと、マンホールの下はどうなってるのかとか、そういったところまで話を追って、進めていったらどうなるんだろうなとか、そういうことも考えたんですけれども、この時には子どもたちの興味がマンホールの模様っていうところに行っていたので、そこはこちらが誘導しすぎないようにしました。

次に、ゴミなのですけれども、これは帰り道に写真を撮って歩いている子がいて公園の写真だとかいろいろ撮っていたんですけれども、だんだんとごみの写真を撮るようになっていました。子どもが「先生ゴミがいっぱい落ちているよ」いるよと言い始めて、何でこんなにごみ落ちているんだろう考えたりとか、「先生ごみが最近多いんだよね」とか、「マスクって何でこんなにゴミ箱に捨てないだろうね」とか話しながら帰ったときがあったんですね。

ある時、1人の子が「先生わかった。何でごみを町に捨てるんだろうというのが分かったよ」ということで、「何でだと思うの？」と聞いたところ、「町の中にごみ箱がないんだよ、ごみ箱がないから道路に捨てたんじゃないか」と、子どもの考えを聞くことができたんですね。

町なかにごみ箱がなくなったっていう背景もいろいろあるとは思うんですけれども、この問題に考えていくっていうことがまた学んできたことなのかなというふうに思ってます。

吸い殻、たばこの吸い殻とかも話ですけれども、1人の子がですね、「先生側溝の網のところには煙草を捨てていいんでしょう」と言ってきたので、「いや、駄目なんだよ」と話したところ、「でもうちのパパは捨ててるよと」言うのですね。

子どもって、大人の姿とか、そういうことをよく見ているんだなっていうことも気づきましたし、「一般的には、それはよくないんだよ」と話をしました。私達の方も小学校訪問を通してごみに対してとか、様々なことを考えるきっかけになるんじゃないか感じました。

それで、小学校交流も含めて行っていたんですけども、私たち自身がまず幼保小連携を考えたときに、アプローチカリキュラムと、あと学校と直接交流をしていくっていうことが小学校との連携と思っていたんですけれども、こういったマンホールだとか、ゴミだとか、小学校以外でも学びに繋がるんじゃないかということで、私たちは話をまとめました。

課題としてはですね、アプローチカリキュラムの作成もそうなのですけども、就学に繋がるものをどのように活動の中で進めていただき、保育の中でやっていくかっていうことが今後の課題になっていくんじゃないかということことで話をしました。

そして、今年度ですね、指導計画の見直し、新たに作成ということもしてきたのですけれども、せっかく昨年度良い取り組みをしてきたということもありながらも、やはり新型コロナウイルスの影響というのはすごく大きくて、なかなか園だよりの持参もできず、今年は工夫して、発送郵送をすることで対応していこうということで実施しています。また、コロナウイルスが落ち着いたときに、学校に持参したいなとは思っているんですけれども、そういった工夫をしています。

それとですね、石川教務主任にとも結構フレンドリーにお話をさせていただいているんですけれども、先日ですね石川教務主任と情報誌交換する機会がありまして、新型コロナウイルスの対策はどういうふうに行われてるだとか、スタートカリキュラムということも存在しているのは知っているのですが、学校再開の時期がバラバラなのにどういうふうにやっているかということも気になっていたので、そういったところを聞いたりだとか、こども園の自粛中の保護者対応とか、今年度の交流どうしていこうかとか、そういった話を今しているところですね。

先ほど運動会の話もちょっとしたんですけれども、そういった話をすることができました。

今年度の保育内容のほうでは、昨年度の取り組みも踏まえつつ、小学校教育との連続を踏まえた保育内容の充実、見直しということで、どういったところで、子どもたちが就学に繋がっていけるだとかもそうですし、今までの活動をもう1回見直して何をねらっているのかとか、振り返りをしていきながら、日々の保育を考えていくことをしています。

子どもたちの交流もそうなんですけれども、何より小学校との連携がすごくとりやすくなったということが私たちはすごく大きいことであります。

散歩で外に行った中で、先生とすれ違うと「こんにちは」と言いながらすれ違うのですけれども、そういった風通しのよさということを含めたことがすごく大きいと感じています。学校の方は人事異動とかもあるので、どうやって、この取り組みをつなげていこうかとか、そういったことまで考えていく必要があるんのではないかということで話をしているところですね。

私たちの発表は以上になります。

ありがとうございました。

（司会）

ありがとうございました。

次に高洲第一保育所村田先生お願いいたします。

（高洲第一保育所村田主任保育士）

高洲第一保育所の村田と申します。よろしくお願いいたします。

2月の公開研修会では、令和元年度アプローチカリキュラムに取り組んだ経緯と振り返りを報告させていただきました。はじめに高洲第一保育所の保育目標と概要等についてお話しさせていただきました。保育所がある高洲地区は市内でも多くの外国人が在住している地域でもあり、外国人児童の割合が令和2年2月現在、34％となっています。

昨年度、年間反省をする中で、保育の見直しが月の指導計画、日誌に結びつかない、考察の部分が難しいという課題からミーティング時に記入しやすい様式を用いての話し合いを行うようにしました。「10の姿」に対しての理解は壁新聞へ「10の姿」を入れる、保育所児童保育要録の個人の目標を考える時期が要録を作成する時になってしまったという反省から年度当初の年長児の個人別目標の設定立案会議に所長、総括主任が参加するなど具体的な方法を上げて、取り組んできました。

アプローチカリキュラムへの取り組みとしましては、千葉市版アプローチカリキュラム作成の手引きをもとにしながら所内で学びを深めていきました。4、5月は現状の把握ということで年長児の姿を出し合いながら個人の目標を考え6月には高洲小学校に行き入学した児童の様子を聞く機会を設け、課題を共有しました。7月からは昨年度の5歳児の指導計画をもとに活動や遊びの中で見られる子どもの姿を「10の姿」と関連付け、活動内容、環境構成、援助を見直していき、10月の指導計画を作成しました。

具体的な見直しについては、4,5月は3歳以上児で1枚の様式に記入していましたが、具体的に書き入れることでスペースが足りなくなり、６月からは５歳児のみの月の指導計画を作成することにしました。

個別支援の際に海外にルーツを持つ子に対しての配慮は「多様なニーズへの対応」がやはり必要であり8月より「外国人児童への配慮」欄を追加しました。また、気づきの欄によい姿や今後の手立ても記入し、課題と次月への方向性の欄はねらいに対してすべてのまとめや小学校との連携について記載することで次月の指導計画が具体的に立案できるというアドバイスをいただきました。

高洲小学校の市原先生からは子どもの活動内容の欄で印をつけることにより重点項目を意識し、保育を進められるのではないかとのアドバイスをいただきました。

個別支援後、所内で話し合いをし、10月からは新しい様式でアプローチカリキュラムを作成しました。アドバイスを受け、振り返りをするときに“出来たこと”と“次月も継続すること”をマーカーペンで色分けしたことでとても分かりやすくなりました。

年長児27名はやはり隣接の高洲小学校への就学が一番多くなりますが、その他11の小学校へ就学しました。

今年度の年長児は意欲的で活発、優しくて面倒みが良い等たくさんのいいところ発見したと同時に、自分の思いを優先して相手の気持ちを考えられない、物を大切にしない、自分に自信がないなどの課題も見えてきました。その姿を「10の姿」に当てはめて、特に【自立心】【共同性】【道徳性・規範意識の芽生え】【言葉による伝え合い】の４項目に重点をおくように話し合いました。

ここから事例についてお話します。

5月に高洲小学校で開催された運動会の練習風景を見せていただきました。小学生の姿を見て、「小学生は走るのが早いね」「バトンは　こういうふうに　もらってるよ」と子ども達が気づき、保育所に戻ってくると、小学生がやっていたようなバトンタッチを真似する姿がありました。その様子を壁新聞に載せると、指をさしながら子ども達は感じた事を保護者に伝えていました。その後の保育参加では、“お母さんお父さんとリレーをやってみたい”という声も出ました。

10月には運動会に向けたリレーが盛り上がり、高洲小学校の町探検に来た2年生や職場体験に来た6年生とも一緒に楽しみました。そして、6年生の走る姿に感動していた子ども達に質問コーナーを設けると「どうして　走るのが早いの」「どうしたら　大きくなるのか」とたくさんの質問が溢れてきました。質問に対し「ごはんを　たくさん食べると　大きくなるよ」「野菜も　食べるからだよ」と6年生がわかりやすく答えてくれました。限られた時間の中でしたが、子ども達にとって貴重な体験になったようです。

そして、保育所の運動会も終わると、近隣の保育所との交流が盛んになり、同じ小学校へ就学する子を見つけると「同じだ」と喜んでいる姿がありました。リレーを通して、同じ目標に向かって取り組む（考える・応援する）たとえ負けたとしても、「次があるから」と自分の気持ちに折り合いをつけようとする姿から仲間意識が見られるようになり、当初の課題として出していた【自立心】【協同性】の育ちに繋がりました。

次に水族館ごっこになりますが、折り紙で魚などを作るうちに、「ホームセンターに魚がいっぱいいたよ」「図書館に行ったらたくさん本があって、そこにも魚の本があるよ」という声が聞かれ、近くのロイヤルホームセンターや高洲小学校の図書室に見に行く機会を作りました。目的をもって出かけることで気づきも多く、夢中になって魚の種類や色を調べる姿がありました。その姿を壁新聞にして小学校にも持っていきました。

当初の行事の“縁日ごっこ”は子どもの興味が“海の生き物”へ膨らんだ為、“水族館ごっこ”へ形を変え、それに向かって大小の魚作りが始まりました。３歳未満児クラスの子ども達も招待したいということで広い場所のホールを利用して行い、1人の子どもの折り紙遊びは保育所全体を巻き込んだ遊びへと発展しました。

4月当初は自分の考えを優先していた子ども達ですが、自分の興味を受け入れられ水族館ごっこへとつながった体験から友達の思いも受け入れることができ一緒に遊ぶ楽しさを味わえた活動となりました。課題としていた【道徳性・規範意識の芽生え】【言葉による伝え合い】の育ちに繋がりました。

次に給食室と保育室が連携したということにより、食への興味関心が広がりました。外国人児童の中には食文化の違いから「箸を使わない」「ご飯しか食べない」などの姿が見られる中、給食室と保育室が連携した食育活動について紹介させていただきます。食材ボードに毎日の食材マグネットを栄養士が貼っていましたが、その姿を見ていた子ども達から「僕たちも　やりたい」「できるよ」という声があがり、子ども達が食材マグネットを貼るようになりました。なかなか自分の思いを周りに言えない子も友達と分担しながらだと、「知っているから私にやらせてね」と言えるようになりました。食材に対しての興味、関心、“食と体の関係”についての理解、友達と一緒に考えて完成させる喜びを感じ自信をもってマグネットを貼るようになってきました。

11月からのクッキング保育では衛生面に十分留意しながら自分で作る楽しさを味わいました。保育士等が作り方をわかりやすく知らせると、リンゴの包み揚げを自分の分だけではなく、友達の分も作る姿や、友達と協力しながら作る姿が見られました。食材ボード等の取り組みを通して、食材に対しての関心が高まり、食事中に「人参が入っている」「体の調子を整えるものだ」等意識して食事をする姿が見られるようになってきました。また、友達の前で話をすることが苦手だった子が友達と一緒に食材やメニューを紹介することで自信がつき、友達の話を最後まで聞こうとする姿が見られるようになってきました。育ちとしては、【健康な心と体】【言葉による伝え合い】の部分に繋がりました。

連携校の高洲小学校とは、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し下の表の活動を取り入れてきました。

|  |  |
| --- | --- |
| 毎月、保育所便りを届ける | |
| 5月 | 運動会リレー練習の見学をさせてもらう |
| 7月 | 図書室に行き本を見たり、校内見学をさせてもらう  （見学後、感想、発見を壁新聞にしてみてもらいに行く） |
| 9月 | 津波訓練で小学校の校舎に避難する |
| 10月 | 職場体験（6年）町探検（2年）で来所した小学生と交流する |
| 11月 | 学校探検に行き校庭で遊ぶ  （感想、発見を壁新聞にしてカラーコピーを届け掲示してもらう） |
| 12月 | 高洲小学校以外の入学先の学校に散歩に行く（入学先の小学校マップを作る）  1年生との交流会に参加する |
| 1月 | 「小学校ってどんなところ？」  （共通の話題で壁新聞作り） |

保育所からは「月のおたより、壁新聞のコピー、アプローチカリキュラムを届ける」「保育所で行った中国語講座に小学校職員を誘う」「授業参観を見に行く」等、行っています。小学校は「保育所が持参した壁新聞を掲示」「１年生の担任とのアプローチカリキュラムの共有」「保育所主催の中国語講座へ日本語を教える小学校職員の参加」「モデル園の勉強会へ教務主任の参加」等があります。

保育所は、外国人児童の保護者も多い中、視覚で伝えられるよう、3歳未満児はクラスごとのフォトフレームを利用し、保育の内容をわかりやすく伝える工夫をしています。3歳以上児は壁新聞で知らせ「10の姿」を記入しています。保護者の方から「10の姿」に対しての質問等は今のところありませんが、繰り返し目にすることが大切なのではないかと思います。

職員同士の交流としては、今回は小学校をたびたび訪問し、交流することで保育所の年長児の姿、保育の様子をいろいろな先生方に見て知っていただく機会となりました。毎月の保育所だよりを職員室前の廊下に掲示してもらい、アプローチカリキュラムも読んでいただきうれしく感じています。また、実際に年長児が小学校を訪問できたことで子ども達の安心感にもつながったようです。

アプローチカリキュラムの作成にあたり、年長児の姿を全職員が共有することで、いろいろな意見が出されまた、作成したカリキュラムを何度も読み返すことで文章にする難しさを感じながらですが、カリキュラムはとても具体的になりました。そして、今の子どもの姿から「10の姿」のどれに当てはまるかを考えながら保育を進めるようになりました。就学後の子どもの姿を共有することで、各年齢のカリキュラム作成に発達の連続性を意識した、今の関わりが重要であることを理解しました。

また、振り返ることで次月への課題を的確に捉え、やるべきことが見えてくるようになったことから、重要さを感じ、他の年齢担当も月の指導計画の見直しを行うようになりました。

個別支援で砂上カリキュラムコーディネーターからは、子ども達が話し合う場では「子どもから出た意見をボードに書き出して視覚的にわかりやすくするとよい」「小学校などに出かける時には、行く前に目的を話し合ってから行くとよい」、保育士等が作っていた壁新聞は「子ども達と一緒に作るとよい」「ひらがなスタンプなどを利用すると、文字が書けない子も取り組みやすい」また、「子どもの気づき、感じたことを小学校にフィードバックできるとよい」というアドバイスをいただき保育に取り入れてきました。

今年度の取組ですが、月の指導計画は、昨年度に見直し変更した為、今年度は同様の様式の使用を継続しています。3歳未満児の月の指導計画においても幼児期の終わりまでに育って欲しい姿が5歳後半に突然現れるものではなく、長い育ちの中でそういう方向に向かうこと期待していることを再確認しました。3歳未満児の子ども達の姿も「10の姿」を関連づけて反省をするようになり、また、3歳以上児の月の指導計画と同じように、気づき・反省欄を設けそこにすぐに書き込めるようにしました。

また、小学校の連携については、今年度は新型コロナウイルスの関係で、思うように連携をとることができませんでしたが、その中で何ができるか、何を続けていけるかを考えています。

前年度は子ども達と保育所だよりを小学校へ届けていましたが、今年度は職員が届けています。保育所に咲いていないアジサイを職員が頂きに行き子ども達が見て制作したり、おたまじゃくしの飼育のために小学校の池の水草を貰いに行ったり、職員の交流は続けています。また、小学生のいない夏休みを利用して、3歳以上児が昇降口前までの津波避難訓練を行いました。今後は校内の階段を3階まで上る訓練もしたいと思っています。毎年、行っている2年生の町探検、6年生の職場体験等の子ども同士の触れ合いが難しい時期ですが、小学生に質問したいことを手紙に書いてやり取りできるかも思案しています。

保護者との連携としては、前年度と同様に壁新聞を中心に、保護者にも子ども達の姿を知らせています。高洲第一保育所は外国人児童が多いことから、新しい活動を始める時にはわかりやすいよう、絵や写真で知らせています。

また、年長児が活動の振り返りをするときに話し合った内容は、誰もがわかりやすいよう、写真を提示し見ながら話し合うことで外国人児童にも伝わり、話し合いに参加してみようと思う環境づくりに努めています。

新型コロナウイルスについては、職員間でも危機意識の差もあり共通理解ができるように危機管理を進めています。一つ一つ検討を重ね、小学校との連携を含め、新型コロナウイルス感染症の為、できないではなく、どうすればできるのか、今できることを考えやってみることが大切だと思っています。

以上となります。

（司会）

ありがとうございました。続きまして意見交換に移ります。

意見交換の司会は冨田先生お願いいたします。

また、意見交換後に冨田先生から講評をいただいてよろしいでしょうか。

それではお願いいたします。

（千葉大学冨田特命教授）

思い起こせば半年前ですね。コロナ禍が心配され始めた時期でしたが、今年度は３園合同の会は開催しないため、松嵜先生、砂上先生、そして私の３人はそれぞれの担当した場所（園）に赴いて合同勉強会を実施しました。その報告を聞いても、各園での取り組みの具体的な事例がたくさんありましたね。土気こども園ではマンホールの話や影遊びの話など、各園、それぞれ特色ある事例があり、その特徴は違いますね。違うのは当たり前で、園の方針で例えば3から5歳までの縦割りの年齢構成の中での5歳児へのアプローチカリキュラムをどう実現するか、一方、年齢別の構成で保育している園ではどうするのかなど、園ごとの多くの学びがありました。また、多少、園の環境は違いますので、その環境の中であらゆる資源を、どの園も有効に利用し、工夫したりして下さっていましたね。やっぱり、カリキュラムの見直しというところがスタート地点（目標）にあって、その目標に向かって仲間と環境の見直しながら、さらには小学校とどう繋がっていくかという工夫があって、結局、「人を通しながら、仕事をしながら繋がっていったな」という感想を持ちました。

それでは、皆さんの事前質問を提出していただきましたので、これから、各園に紹介していただいたりしながら進めていきたいと思います。

発表していただき、また、必要に応じて順に戻ったりなどしながら進めても宜しいですかね。

私の手元に由田学園千葉幼稚園と花見川第三小学校先生からの質問表を、その次に、明徳土気こども園、土気小学校、そして高洲第一保育所となっていますので、この順番で進めて行きたいと思います。

質問票の内容をご紹介いただいて、それに対して皆様からご意見いただければいいんじゃないかなと思います。

一応、「うちの園ではこうでしたよ」っていう、座談会ですので、気軽に具体的に実践した内容を紹介するような形で進めたいと思います。

質問票のご紹介の後に、皆さんとそれについてディスカッションをして深めていけたらと思います。

千葉幼稚園さんから質問表に基づいてその次は花見川第三小学校さんからもいただけたらと思いますのでよろしくお願いします。

質問票の中をかいつまんで皆様からもお聞きしてみたいこと、二つ、三つぐらいに絞ってご紹介いただいて皆さんのご意見いただく方が良いかと思います。

そのような進め方がコンパクトで良いかなと思いますが、いかがでしょうか。

（由田学園千葉幼稚園山﨑園長）

由田学園千葉幼稚園です。

アプローチカリキュラムの取り組み等については先ほど説明の中でお伝えした通りです。

今年度はコロナ禍で制限がある中で小学校との連携が難しい状況です。昨年行ってとても良かったことが、幼稚園と小学校の先生同士の交流、保育を見ていただく場、互いにお話をする機会が持てたことです。やはり先生同士話ができるということが、すごく大事だと感じています。

今年度はコロナ禍で続けられていない実情が私達にはありますので、本日、他園の取り組み事例から、こういうふうにしていけばいいんだっていうヒントや学ぶことができて、とてもよかったと思っています。質問票については、先ほど説明の中に入っておりますので逆に先生方から助言をいただけたらありがたいと思っています。

（千葉大学冨田特命教授）

今年はやっぱりなかなか人が集まるのが難しいですかね。

（由田学園千葉幼稚園山﨑園長）

そうですね。

ようやく出来たという感じで、本日栗林先生ともお目にかかれてよかったなと。

他園の取組のお話を伺えてよかったなと思います。

（千葉大学冨田特命教授）

去年やれたことより、できないものの方が正直多いでしょうしね。

ほかの園からもその人が繋がることで今年度ちょっと苦労したことや、工夫してるところを聞かせていただくとよいですかね。

（由田学園千葉幼稚園山﨑園長）

小学校の先生方に伺いたいのですが、先ほど高洲第一保育所の村田先生からの報告を伺って、アプローチカリキュラムからのスタートカリキュラムについて、今年度大変な中で具体的にどうされたのか、お話していただけるとありがたいと思いました。

（千葉大学冨田特命教授）

まず学校の先生方から一言いただいていいですか。

今の質問に対してどうでしょうか。

せっかくつながったところなので工夫している点などで、いかがでしょうか。

（花見川第三小学校栗林教務主任）

花見川第三小学校の栗林です。

コロナ禍という状況ですので、正直今まで交流について意識できていたかというと、意識できていなかった状況です。この座談会を実施すると聞き、幼稚園と交流ができていなかったと認識しました。

昨年度は勉強会に参加させていただいたときに、交流をしなきゃという意識が多少出てきたのかなというと感じていましたが、正直4月、5月は学習ができておらず、6月開始になって、今、いかに今年の学習内容を今年で終わらせようかというところで精一杯なところが正直です。

昨年度の記憶を思い起こすと、やっぱり公開研修会でもお話ししましたが、先生方の意識を変えるという、小学校の意識を変えるということが非常に大切だなと感じたので、昨年度校長と話をして来年度は教員が幼稚園のほうに行かせていただいて、保育園に行かせていただいて授業を見てみるというのはやっぱり大切になってくるはずだろうと話をしていました。

やはりコロナ禍というご時世なので、先日も山﨑園長先生からご連絡をいただいても、正直、校舎に入れるのは何かあった時に・・・と考えてしまいます。

ただ、校庭来ていただいて、どんぐり拾ったり、遊んでもらったり、遊具を使ってもらったりできるとは思いますが、それ以外に何ができるかっていうと、何ができるかと考えると昨年やった手紙のやり取りとか、場合によってはテレワークではないですが、直接会わない、やっぱりそういうことを使いながらやっていくということも、このウイズコロナの中では交流方法も考えながら実施することをやっていかないといけないのかなと思います。

（千葉大学冨田特命教授）

コロナ禍で、これまでとは違う側面から、交流のチャンス、創出していかなきゃいけないと思います。

ZOOMを使って、小学校のクラス訪問させてもらうとか、幼稚園の様子を覗かさせてもらうなど。

手紙についても、幼児は文字をまだ正確に書けない年齢ですから、絵で描いてメッセージを伝えたりしたら、小学生のお兄さんお姉さんは文字ではない伝え方の違いに気づき、幼保と小学校の表現技術が違うに気づくこともあり、幼児への理解（今度来る小学校1年生への理解）になるかもしれませんね。

とは言いながらも今年は特に学校はそれどころではなかったかと思います。

単元があってですね、こなさなければならないタスクもあるので、苦しかったとという事をお察しいたします。

土気小学校の石川先生、これまでの話を聞いて、今年は皆さんがコロナ禍でご苦労されているといった状況も共感する中で、何かお考えになったところはありますか。

（土気小学校石川教務主任）

本校も花見川第三小学校さんと一緒でやっぱり苦しい状況でありまして、お互いが困るので、やっぱり無理はできないということを察しながらの現状です。

この前に龍先生とお話する機会があったので、今そういうふうなお互いの現状なんだっていうのを把握出来たというのは、たまたまではの機会ではありましたがよかった思っています。

４月から小学校は、就労している保護者などを対象に学校で子どもを預かったのですが、知っている子ども、明徳土気こども園さんの卒園の子が来ていたんですよ。

なので、そこで実態を見れたので、6月から学校再開して、最初に・・・

（千葉大学冨田特命教授）

それではスタートカリキュラムどころでは無かったですね。

一応やれた（実施できた）のですか？

（土気小学校石川教務主任）

そうですね。でもスタカリをぎゅっと内容を濃く、期間をちょっと短めにやって、卒園児の姿をみて、質をもっと上げてもできるなというのはわかりました。

（千葉大学冨田特命教授）

学校を休んでいる間でも子どもたちは育っていますからね。

（土気小学校石川教務主任）

そうなのです。ゆっくり見れた、少ない人数だからこそ、じっくりその子を見れたっていうのがありました。

そこでスタカリの内容を濃く、例えばトイレの使い方を、もうこれ大丈夫かなというレベルでできていましたね。

（千葉大学冨田特命教授）

石川先生はですね、アプローチカリキュラム策定の会議には土気こども園に毎回、通ってこられた方で、ご自分が学校でスタカリを作るために、土気こども園での活動を踏まえて、早々とですね、打ち合わせの場にスタカリをつくってくださって。それを、こども園の先生方に「こんなの作ってみたんですよ、どうでしょうこれでつながりますかね」と見せてくださいました。スタカリを作り、それをこども園で保育者と教師がシェアすることによって違う土俵（こども園と小学校）でも人が繋がり合うことができましたね。

だから「そのスタカリがどう生かされたかな」私も思っていますけれども、石川先生は昨年、スタカリを作った経験があったので、コンパクト化できやすかったとか、今年度もうちょっと見通しが立てられたとか、どうだったんでしょうか。

（土気小学校石川教務主任）

やっぱりお互いを知るということ、やっぱり僕にとってはすごくいい成果、効果、収穫だったので、また今年度末にスタカリ作るときに、こども園につなげる時にもう少しレベルをあげることができるかな、そしてほかの教科学習との接続ももっとハードルを上げるだけじゃないんですけど、子どもの実態に合わせてお互いに段差少なくした学習活動を展開できるのじゃないのかなというふうに考え始めました。

（千葉大学冨田特命教授）

去年を知ってるからですね。

（土気小学校石川教務主任）

そうですね。

なので僕が異動しても引き継ぎで龍先生を紹介して明徳土気こども園を紹介してうまく引き継いでいければよいかなと思っています。

交流の仕方もさっきオンラインでと話が出て、なるほどそういう手もあるのかと思いました。

（千葉大学冨田特命教授）

そうですね、座談会でアイデアがでましたね。

オンラインでやったっていいわけですから、何も顔合わせなくてもできるので。

前に作った内容を共有しながら「そちらの園ではそこまで育っているのであれば、こっちのスタカリ（学校）はここまでできるね」といったこともできなくはないなと、私も聞きながら思っております。

（土気小学校石川教務主任）

小学校の先生としても新しい視点というか教育計画がつくれるのじゃないかなと。

（千葉大学冨田特命教授）

10の姿というですね共通の目当てっていうのは、幼児教育と小学校教育の重なっている部分に持てたのが、わかりやすさに繋がってるんだろうなというのを聞いていても理解できたましたね。

龍先生の方から質問票に絡めつつ、今年度の取り組みなどお話をよろしいですか。

（明徳土気こども園龍主幹保育教諭）

発表の中でも話をしたいんですけど、このコロナウイルスがある中で、さあどうしようというところで、正直足踏みしているっていうところが現実です。今できることは自分たちの保育の見直しをするっていうことはできることなので、昨年の取り組みもそうですけれども、今年もう一回幼児教育てどうなんだとか、これがどういうふうに小学校に繋がっていくのか、そういったところを園内で話し合う。小学校との連携というところでなくて、自分たちでできることをやっています。これから先コロナがどうなるかまだわからないんですけれども、コロナ対策どうなっていくのかとか、交流会どうしようか、そういった連携ができなくても、何ならできるか、そのような話も話しやすい関係なので、情報交換していきながらできればと思っています。

（千葉大学冨田特命教授）

今後、「交流会は本当にできるか」という迷いや課題ありますね。実施したら良いかというと、そうでもない、やればいいというものではないですね。どうやってお互いのコミュニケーションレベルを形が変わっても上げるかという話で、例えばリモートを使ったりして、交流することは可能なのかもしれませんね。

実際の交流会は現段階ではちょっと危険があるので、最近はコロナ禍も終息ぎみですが、また、いつ拡大するかはわからないですしね。

（明徳土気こども園龍主幹保育教諭）

さっきのオンラインっていう話も出ましたけど、そのオンラインがそうかと思いながらも、子どもたちがどうやってオンラインで活用して学校に対して、どのぐらい興味を持つだろうかとか、どのような工夫をしたらよいか考えていきながら、いろいろ話を聞きながら考えたところです。

（千葉大学冨田特命教授）

学校という環境を仮想でもオンラインでも利用して、例えば、トイレってこうなってるんだ、お部屋（教室）ってこんな広いんだとか実感ができますね。このような具体的な情報提供は幼稚園や保育園でもしていかないとね。「学校訪問に行けなかったら、学校の雰囲気も感じられない」などと諦めずに、どんな風に何を使ってやるかですよね。

どうですか。

小学校の先生方としては、「今の時期では交流会できないかも」って、やっぱり花見川第三小学校さんも悩んでいますか。

（花見川第三小学校栗林教務主任）

そうですね、お子さんに何かあったらというところがあるので、同じ室内の中で触れ合うという交流は難しいのかなと考えています。どうしても手をつないだりとか、密になってしまう。そうなってくると、違った交流、子どもからの手紙が良いのか、幼稚園の先生が動画を撮りながら授業を受けたりとか、こんな教室があるんだよと撮ってもらう。

また、1年生の教室に入ってインタビューをすることで、幼稚園児も小学校に行ってこんなことをしたんだと興味を持って、去年の年長組の友達が登場してもらうと面白いかもしれませんね。

今までの内容より工夫をすればできること、今までとは違うことに知恵を絞ればできるところがあるのかなと。

ただそれが果たして本当に幼稚園児に、1年生、2年生にためになるのか、やってみないとわからないと感じました。

（千葉大学冨田特命教授）

小学校の1年生2年生にも「幼稚園から先生が来て学校のことを知らせているみたいだよ」なんて、そんな話をすれば、小学生の子どもたちも「そうか、新1年生が来るのか」と新1年生を迎えるモチベーションになりますよね。

（花見川第三小学校栗林教務主任）

そうですねそこで意識付けというところが大切になると思います。

何かしらの方法で繋がりを持っていくというところが今年は大事なのかな。

（千葉大学冨田特命教授）

そうですね。

密にならないように大人が工夫して、なるべく生に近い情報を配信出来たり、シェアできたりが大きな目当てになるかもしれませんね。それでは高洲第一保育所からも質問票に触れながら問題点というか課題について共有できればと思ったんですけど、いかがでしょうか。

（高洲第一保育所村田主任保育士）

高洲第一保育所でも皆様の保育所や小学校ように何ができるのか考えています。今後就学前健診があり、子ども達も小学校への興味が広がると思うので、子どもたちと担任と話をしていきたいと思っています。

ありがとうございます。

（千葉大学冨田特命教授）

就学前検診はですね、どういうふうに実施するかは工夫が必要なんだろうなと思います。けれども、いろいろな形で自然に無理なく段差に関わることを、地域でも子どもたちが様々な経験をしてると思いますよね。

それは、例えば夏祭りだったり、地域のイベントだったりね。ところが、今年はコロナ禍で、それがほとんど中止になってしまっているので、緩衝材が少ないっていう印象ですね。今年度の小学校一年生も、6月のまでの休校期間があって、でも学校としては、休んだ分の単元を学習スピードのレベルを上げてやっていかなければならない状況でしたね。でも、やっぱり圧縮された学習環境はどうなんでしょう。コロナ禍がまたこれが起こらないとは限らないので、私たち大人が「いかに頭を柔らかくしておかないと駄目なんだななあ」と考えておくことが切実な問題だと思いますよね。

今日は、若い先生も参加して下さっていますので、これまでの話を聞いてみて「今年何ができそうかな」って感じていることがあったら、折角ですから発言してみましょうか。明徳土気こども園の後列のお二人、座談会ですのでこれまでの話を聞いての感想でもいいですので。お二人は、昨年モデル園をやったご本人ですから。

（明徳土気こども園年長担当石渡）

今回はこのような形で聞けたのがすごく良かったと思います。

今回コロナで昨年できたことができないことがあると思うですけれど、その中で今までできたことを工夫してやるとか、保育園の職員が小学校へ行けるようになりましたし、私も昨年やってみて、今年の子たちがどのように過ごしているのか、小学校で過ごしてるのかすごく気になる部分ではあるので、そういう取り組みをやってみて、皆さんの意見を聞けて良かったです。

（明徳土気こども園年長担当金野）

私も、昨年アプローチカリキュラムに取り組んで、やっぱりその先がどうなるのか、保育の現場にいると小学校への姿見えてこないので、そこで去年の授業参観させていただいたように、そういう機会が大人だけでも継続して、今後の活動にも繋がるのかなっていうのは思います。

（千葉大学冨田特命教授）

教え子たちがどうなってるかね。

去年は見れたけど今年一番力を入れた子たちがどうなってるのは見れないっていうのはね。その辺どう実現できるかですね。

ビデオ、映像をどこまで撮っていいのか、公開の問題や個人情報の問題も課題だなと思いますから、建物とかね、物だけに絞って、学校の先生に出ていただくとかですね、個人情報にかからない人に出てもらうとかですね。

確かに難しい部分もあるのかな、なんて聞きながら感じてます。

でも教え子には会いたいですよね。

アプローチカリキュラムのところは、自分のアプローチやったら次の年どうなってるか、いろいろな授業参観みたいに、元担任の特権のように見に行けるというのが自分がやってきた道のりがどういう結果を目指して今学校に適応をしているんだろうという原因と結果じゃないんですけれども、そこまで見れてやったところのアプローチカリキュラムもやり切った感があるんだろうけどそこが出来ていない寂しさがあるということで、大変だから感じるやった本人だから感じるところなのかな。

ありがとうございました。

園長先生たちも御意見ありますか。

（明徳土気こども園北村園長）

今日の発表聞かせていただいて、同じテーマで千葉市が方向性をつけて取り組みしやすいようにしていただいているんだけど、それぞれ取り組みの仕方とか、表現とかの表し方が随分違うなっていうのがとても感じ、勉強なりました。

あとうちの園の取り組んでの感想なんですけど、何よりよかったのは大人の風通しが土気地区は前からの取り組みがありますが、風通しがよくなったっていうのは、コロナであっても、大事にしてやれるのキーワードかなと思いました。

副園長先生からもお願いします。

（明徳土気こども園岸井副園長）

各園の実践を聞かせていただいて勉強になりました。

明徳土気こども園に4月から入りまして、今、嘱託で副園長をさせていただいております岸井と申します。

初めて土気に来て、すごいなと思ったことが一点ありまして、一年生のお子さんを小学校の先生が送っていらっしゃる場面があり、道路ですれ違う際、やけに親しく龍先生と石川先生が道路で挨拶をされていて、何だろうこの関係はと思っていました。このアプローチがあって、石川先生ということを教えてこれはいい取り組みだな。

顔が見えて、先生と名前を呼び合って、どうですかって道で声を掛け合える関係が育てるということがね、同じ地域でそれが一番大事ないんじゃないかと思っていたので、すごくよかった。

もう一点はですね、こういうコロナの時代で何ができるかっていうことをいろいろ工夫、模索し、何が良いかとあるんですけど、どんな時代でも小学校に行こうとしている年長組の子は不安と楽しみがあると思います。

原点として、子どもの視点が強くないと一体何を不安に思っているのだろう、何を楽しみに思ってるんだろう、何が段差になるかっというところから出発すれば、おのずからその不安に答えるには何があるかというのが考えられると思います。

何ができるからが先じゃないんじゃないかなっていうふうに思います。

（千葉大学冨田特命教授）

ありがとうございます。

コロナ禍で、出来ないことも増える中、「もう1回原点からスタートしたら」という岸井先生のお言葉ありがとうございます。

じつは岸井先生は私の大先輩で、鎌倉女子大学時代の上司なんですね。

皆様ご存じの通り、岸井先生は全国区の先生（全国でご活躍の先生）で大変著名な先生でいらっしゃいますが、土気こども園は贅沢な先生を迎え入れたんですね。

それでは皆さんお手元にフレーベル館の雑誌が届いたと思います。

こちらは砂上先生がですね、フレーベル館の保育ナビにコーナーとか、コラム持ってらっしゃっていて、前からご縁があり、千葉市のアプローチカリキュラムモデル園方式をやるならば、ぜひ取り上げて、プロモーションしていこうっていうのが一つの動きでした。結構丁寧に取り上げていただいて良かったです。

最初のあやめ台幼稚園からずっとこう定期的にフレーベル館で記事として掲載してくださっていたんですね。

良い記事にもなっていますし、何がポイントかもコンパクトに紹介されているので、「このような実践は形に残しておくとことは大事かな」と、振り返ってみて思いますね。

また、2月に行われた土気の報告会に学研編集者の方が参加されていて、土気保育園の、子どもたちの姿をですね、学研の保育アップという雑誌に土気こども園さんはご協力している縁があったようです。

今回の報告会では前年度、アプカリを実施した宮野木保育所の先生が率先して手を挙げて発言したりと、なかなか活発な報告会なったのですが、その学研の編集者さんが「ぜひ今度、フレーベル館さんの視点で取材を」という申し入れがあったんです。

大人が繋がるという視点ではどうだろうという話になって。先日取材が終わって校正段階なので、本が出版されたら、また、この仲間でシェアしていけたらいいなというふうに思います。

岸井副園長先生から頂きました一言ですね、「子どもの目線にもう1度立ち戻ったら」というご助言を頂いていますので、みなさんと今一度、一緒に考えたいなと思ったんです。千葉幼稚園さんから順番に、隣にマイクをまわしながら、今年度どうするといった辺りを、一言でもいいですので、感じたことを発言していただけたらと思います。

（由田学園千葉幼稚園山﨑園長）

年長組の子どもたちが小学校に親しみを持つというのは建物に親しみを持つというよりも、小学生に対する憧れを子どもたちは持ちながら、あんな風になっていきたいみたいなところも感じていると思います。

年長組の子どもたちがちょっと疑問に思ったり、こんなことしたら先生は怒るかな、こんなことしたら叱られちゃうんじゃないかなとか、ちょっとドキドキしちゃうという声を小学校に届けたいと思いました。ドキュメント的に撮影に行くこともできることが分かったのですが、逆に子どもたちの声届けながら、返事がどういうふうに帰ってくるか楽しみにしていくこともよいかなと思っています。

千葉幼稚園は、昨年度12の小学校に就学しています。

今年度も多数の小学校に就学する状況があるので、自分の学校についての話題と同時に、自分の学校ではないけれども、地域の学校に遊びに行かせていただくことで、小学校を知る機会になると思いました。アプローチの方法は様々な切り口があることがわかりました。ありがとうございました。

（花見川第三小学校栗林教務主任）

子どもたちの繋がりのほうですが先ほどもお話ししましたけれど、大人同士のつながりで言いますか、千葉幼稚園さんは歩いて1、2分と近いんですけど、昨年初めて見させていただきました。

私今の学校は9年目なんですが、初めて幼稚園の敷地に入りました。9年で初めてなので、近いけど遠いという感じがあるので、やはりそれではいけないのかなと感じました。

先ほどのお話もありましたけれども、そういった関係が私は職員全体でとれるような内部組織づくりや関係づくり一番の子どもたち同士の交流とか、これが近道かなと感じます。

校長先生と話をしながら、幼稚園と話しながら出来ることを増やしていきたいと思います。

（高洲第一保育所村田主任保育士）

高洲第1保育所でも皆様からいただいた意見を持ち帰りまして職員間で話し合い、

子どもどもたちにも話をしたいと思います。

また、隣の高洲小学校と職員同士の関わり、子どもども同士の関わりを持ち繋がっていかれたらよいと思います。

今年度だけではなく、次年度、またその先も続けていかれるような関係を作っていきたいと思います。

（土気小学校石川教務主任）

はい、どうもありがとうございました。

今日わかったこと、学んだことは３つで、交流の方法はいくらでもあることを知りました龍先生のお話とか、本校は、他の園さんからも受け入れがありますので、ほかの園さんともお話ができればなって、必要性を感じられたっていうのが収穫だと思います。

大人の繋がりですけれども、私と龍先生は仲良しというのはあれですけど、先ほどエピソードで、一年生の最初は方面別に分かれて集団で帰って、その時たまたま会ったわけで、挨拶を交わすみたいになったのです。

これがほかの職員でも、「どうもどうもこんにちは」と挨拶のできる繋がりがどんどん広がっていけばいいかなと思いますが、この課題でも、これから職員の中で種をまいていければなと思います。

あと、先ほど岸井先生から子どもの目線に立つってありまして、本日持参したのですが園のお便り、今年は郵送でもらって最近もらった最新号について岸井先生の記事で、幼児の姿、手伝わないことただし見守ることという見出しで書いてあって、これは目からうろこだ、職員の打ち合わせで皆さんに紹介しなければならないというふうに思いましたので、これは小学生の目線に立って、幼稚園児たち、これから入ってくる子たちをどういうふうに関わっていくか、どういった目線に立っていくか何ができるかを考えていければなとなりました。

今日はいい機会でした。ありがとうございました。

（明徳土気こども園龍主幹保育教諭）

今日はありがとうございました。

石川先生からもあったんですけれども、本当に仲がすごい良いということがあるんですが、私も同じことは思っていて、もっと現場の先生同士が繋がれればといいなという思います。

私も一年生の担任の先生方とお話をしてみたいなとか、そういったことを考えていたので、今後少しずつ少しずつ幅が広がっていたら、いいのかなっていうふうに感じたところです。

年長児の不安ということを原点に返るということが大事と聞き、そうだなって思って本当に今お話の中でも様々な交流の方法が出てきたと思うんですけれども、またもう1回年長の子と関わったときに何が本当に必要なのかっていうことを考えて交流していければいいのかなということを園内で話をしていきたいと思っています。

（千葉大学冨田特命教授）

そろそろ時間なのでまとめさせていただいたっていいでしょうか。

千葉大学と千葉市が協働して、設置し推進するというところでこの事業はスタートしましたから、私はそこにいられて良かったと思います。

そして、今日の岸井先生のご助言はやっぱり胸に刺さりましたね。何もないところからその園に元々あるカリキュラムを一つのたたき台にして、それを活用しながらカリキュラムを構成しました。初めから新しいもの全部作るのでは無くて、元々とあるものを自分たちの眼差しと、子どものたちの眼差しを併せて取り込み書き換えていって良いものができたと実感しています。小学校への段差をゼロにするのではなくて、ほどほどの段差を残しつつですね。

それは子どもたちの力で超えられる程度を残しつつ「子どもたちにとってその段差はどうなんだろう」という子どもたちの声に、一生懸命耳を傾けたところがどの園も頑張っていたんですね。そして、1年やり終えてみて気を付けなければならないのは、昨年やったことに縛られないという柔軟な発想も大事だなって思いましたね。

去年、「こうやったからやっぱりウェブ図使わなきゃ」ではなく、「本当にウェブ図で良かったのか」それとも「子どもの声に耳を傾けて作っていたから良かったのか」など、カリキュラムが評価し見直されるべきでしょうね。ウェブ図という形式や方法だけが継承されていくと、窮屈な代わり映えのしないパターン化したカリキュラムになるんだろうと思いますね。カリキュラムをまた作成する時点で、原点に立ち戻り、また、保育者も教師も無我夢中で手探りで先生同士が繋がって、その結果、お互いが気軽に挨拶ができるようになるまでの関係構築ができていくことが大切ですね。後になって、実は自分の子どもたちが学校で知り合いだったなんて後日談もあるような関係が良いですね。

宮野木保育所もそうだったんですね。

千葉市の担当の方の話ですが、宮野木保育所の近隣の園生小学校の校長先生は、その担当者の方が自分の教え子だってことを知り、俄然、校長先生がやる気になって下さり、積極的に協力を得ることが出来ました。

地域に根差したその子どもたちがどんなふうに日々生活していて、その中で感じる段差について、土気は土気、高洲は高洲と地域ごとの課題があると思うんですね。まして高洲周辺は外国にかかわりのあるお子さんが多い地域でもありますから。

千葉市のモデルスタイルというのはとっても良いアプローチだと思っています。

市がカリキュラムを作るのもよいですが、千葉市は、その園が長年培ってきたこと、元々あるカリキュラムを最大限生かして、そして子どもたちの声を取り入れて地域の声を取り入れながら、学校の先生方の力添えいただきながら、アプローチカリキュラムを創って（クリエイト）いく、作り変えていくっていう。

しかし、先ほどみなさんで話題にした原点から考えたら、現在はコロナ禍だからといった状況で出来ることと出来ないこと多いと思いますね。この時代はこの様にやってきたけど、また違う時代のフェーズが来たらそのフェーズの中で保育・教育を進めることになるんでしょうね。子どもの不安や世間方々の声も変わってくるかもしれないんですよね。

その声や不安にフォーカスして、子どもたちに最後まで寄り添うアプローチカリキュラム、そしてスタートカリキュラムを作って、そこをシェアできる大人たちの人間関係作れると良いですね。今回の取り組みでは「本当にみなさんと素敵な関係が構築できて、今後も、その出会いを大事にしたいな」という人との出会いを感謝しつつ、千葉市のこの取り組みを一緒に進めることができきて本当に良かったと率直な感想をもちました。

この後、どんなふうに続けていくかっていうことはですね、千葉市の方針も有るとは思いますけれども、「今できることを子どもたちと一緒にやっていこうじゃありませんか！！」という感じで、閉めさせていただいても宜しいでしょうか。

はい、本当に皆さんご協力ありがとうございました。

大人同士が繋がるのは大事なので、これからも仲良くしてください。ありがとうございました。

（司会）

冨田先生本当にありがとうございました。

そして皆様方、きょうは貴重なお時間いただきましてありがとうございました。

今後も幼児教育・保育の質向上に向けご協力よろしくお願いいたします。

以上を持ちまして座談会を終了とさせていただきます。

本日はお忙しい中ありがとうございました。